

Family Presence during Cardiopulmonary

Resuscitation Jabre P, Belpomme V, Azoulay E, Jacob L, Bertrand L, Lapostolle F, Tazarourte K, Bouilleau G, Pinaud V, Broche C, Normand D, Baubet T, Ricard-Hibon A, Istria J, Beltramini A, Alheritiere A, Assez N, Nace L, Vivien B, Turi L, Launay S, Desmaizieres M, Borron SW, Vicaut E, Adnet F.

N Engl J Med. 2013 Mar 14;368(11):1008-18.

心肺蘇生への家族の立ち会い

<背景>

先進国では心肺停止は毎年 60 万件ある。蘇生(=CPR)の際に立ち会う家族は、感情的身体的負荷がかかるリスクが高い。家族が CPR の際に立ち会うことは、患者の命をとり戻す全ての手だて(蘇生努力)を医療者が行っているという事を理解しやすくする。また家族が患者と最後の別れをする機会を与え、死の現実性を把握するのにも役立つ。CPR への家族の立ち会いが家族、あるいは医療チームに及ぼす影響については意見が分かれており、今回、多施設で CPR に立ち会った家族の無作為化比較試験を計画した。この研究の主な目的は、家族に CPR に立ち会うかの選択を提供することで PTSD 関連症状を生じる可能性を減らせるかもしれない、という事を明らかにする事である。

<方法>

この研究は前向きクラスター無作為化比較試験 cRCT で、フランスの 15 の病院到着前救急医療部隊が 2009 年 11 月から 2011 年 10 月まで研究に参加した。これらの部隊は救急車基地で一つあるいはそれ以上の移動集中治療室を装備しており、最低限のチームとして運転手と看護師、経験豊富な救急医から構成されている。15 の参加部隊のうち 8 つを介入群、7 つをコントロール群とし、自宅で心肺停止になった成人患者 1 人に対し近親者 1 人のみを評価した。介入群に割付られた救急医療部隊の場合、医療チームメンバーが体系的に家族に CPR の際立ち会いたいかなかを質問した。コントロール群に割付られた部隊の場合、CPR の間立ち会うかどうかの選択はルーチンとして家族に与えなかった。

蘇生後 90 日、心理学者が研究の割り当ては知らずに登録された家族に電話し体系的な質問に答えを頂いた。質問者は近親者に IES(PTSD 評価尺度)と HADS(抑うつと不安に関する精神的状況を計測する尺度)を全て聴取した。IES は 15 項目で構成され各項目 0-5 点をつけ Total0(PTSD 症状なし)-75(重症 PTSD 症状)点で評価をした。HADS は 2 つのサブスケールに分かれ、一つは 7 項目からなる不安のスケール、もう一つは 7 項目からなる抑うつのスケールでスコアは Total0(苦悩なし)-21(最大の苦悩)点。HADS は 10 点以上だと中程度-重症の不安あるいは抑うつ症状を表す。主要エンドポイントは 90 日目に PTSD 関連症状を有する(IES で 30 点以上)家族の割合とし、副次的エンドポイントは、不安・抑うつ症状、家族の立ち会いが蘇生努力に及ぼす影響、医療チームの満足、法医学的な損害賠償請求の発生などとした。

<結果>

計 570 の家族のうち 266 は体系的に CPR の間立ち会う選択をし(介入群)、残りの 304 はルーチンとして立ち会うかどうか質問しなかった(コントロール群)。計 342 の家族(60%)は CPR に立会い、228 の家族は立ち会わなかった。心理学的なストレスで蘇生後 90 日の電話インタビューに完全に答えられなかった家族の割合は、コントロール群の方が介入群に比べて著しく多かった。PTSD 関連症状の頻度は、コントロール群の方が介入群より有意に高く、また CPR に立ち会っていない家族の方が立ち会った家族より有意に高かった。不安の症状の頻度はコントロール群の方が介入群より有意に高く、CPR に立ち会っていない家族のメンバーの方が立ち会ったメンバーよりも有意に高かった。抑うつ症状のある家族のメンバーの割合は、コントロール群と介入群で大きくは変わらないが、立ち会った家族の方が立ち会わなかった家族より有意に低かった。

非常に少ない(1%未満)の家族は攻撃的であったり医療チームと衝突したりしたが、CPR に立ち会った 289 のうち 9(3%)の家族が立ち会ったことを後悔したのに対し、立ち会わなかった 186 のうち 22(12%)の家族メンバーが立ち会わなかったことを後悔した。

医療チームによるストレス評価を VAS で測定したが家族が立ち会うか否かによって起こるストレスレベルには有意差はなかった。

<考察>

他施設での無作為化試験において、この研究では蘇生を行った患者の家族が CPR に立ち会った場合、PTSD 関連症状の発生率は有意に低かった。また医療チームのストレスレベルは、CPR の間の家族の立会いによって影響されなかった。

結論として、この研究では、成人患者の家において CPR への家族の立成いは精神的な評価における良好な結果と関連しており、蘇生努力の妨げや医療チームのストレスの増大や法医学的な対立をもたらすという事にはならなかった。